先史沖縄にあった抜歯の風習

出土地：読谷村大当原（うふとうばる）貝塚、座間味村古座間味貝塚

世界には、生前健康な永久歯を無理矢理引き抜く「抜歯」と呼ばれる風習の存在が広く確認されています。抜く歯は民族や時代によって様々ですが、口を開けた時に見える上下の前歯であることに共通点があります。

先史時代の沖縄にもそのような抜歯の風習があったことが古人骨の調査でわかっています。抜く部位は下顎の切歯にほとんど限定されています。今回紹介するのは読谷村の大当原貝塚、座間味村の古座間味貝塚から出土した古人骨で、下顎の切歯4本が抜歯されています。歯槽がきれいに閉じていることから、生前に歯を抜き、それが完治しても生きつづけていたことがわかります。

抜歯の理由には成人儀礼や哀悼傷身などが考えられますが、健康な歯を無理矢理引き抜くものですから、その痛みは想像を絶するものがあったでしょう。

お隣の台湾原住民にも抜歯の風習があったことは良く知られています。彼らが抜く部位は歯根が長くて太い上顎の犬歯と側切歯で、抜く作業も痛みも相当激しいものだったと想像できます。それと比べて先史沖縄人の抜歯は歯根が細く短い下顎切歯のため、台湾原住民よりは楽だったかもしれません。ここらへんが、「ウチナーンチュだな～。」なんて思った人、いませんか？

片桐 千亜紀